役

國歌齊唱

思るけれで市會議員にでも

祝解で入營兵總代答 町目の渡邊貫一氏

も取つた様に市内をソツク ならうものなら鬼いくびで

別會を開催いたしますこと

の關係を永遠に持續し輩凶 なる獨立國として益々健全 なる發展を見るに至りまし

國伊太利も之に参加し日

あります

數多き青年の中

大元帥陛下

乍然支那事變の背後に潜む たものの如くであります

る事ではありません

入營軍人諸君

・又世界の

ひ且つ清楚なる送し

今や滿洲國は日

小可分

るものであります

して帝國

悠々三千年燦さして之を證

大使命を達成し皇運を扶翼

聖戦の

入營軍人諸君

奉らればならぬと確信す

リ返つて歩いて居る人

も見

は洵に

欣快とする所であり

えるが足元に気をつける事

第一と思ふ、尚又平市に

とする諸君の旺溢せる元氣 ます今より帝國軍人たらん 各區長さんがおられ

たので

何にも市會議員だとて異な

本日をト

點はない、 發言權い

有無だけで大 たゞ議席に

るべき渡邊登君外八十三君 使命であ

の武運長久を祈

の大前に於て本年入營せら

どに寄興するは

大和民

れば市會議員の御連中や

はあるまい

吾等も其のお隣りに陣取り

會を待つ事にした。

くする内に開 殿心皇居遙拜、

舘

へ行き入口で會費と交換

殊さらの事吾等を指導し

よりよき大平市を作る事で

一袋を受け

取り二階へと

の息子が

えられたものだ

走物を受け

れに引きかい歡送者の中

は實に言語同斷の方が見

は新聞記者と稱する方々も

十余名もあつて各其手腕

發行所東 北 新福島縣平市南町五 新五九九 Ŧī. 報 鏠

最近又蘇洲を陷れ輝かしき

戦果を收めついあることは

るが

如き結果を招來せしむ

とする態度を示し時局前途

遠でありまして

本懷之に過ぐるものはないな國家の干城さなり範を郷たことは大日本帝國男子のて幾多鍊磨の功を積み優秀

城たるの名譽をかち得まし一於ても磐陽健見の意氣を以 て諸君は選ばれて帝國の干ませうが今後の軍隊生活に

京政府の排

政策を援助す

列國の干渉を誘致し以て南

最も重大なる秋に際しまし

心を抱かれて居

るのであり たる次

ば

る覺悟を新たにするもので。表的青年として入隊せらる

ります斯の如き國步艱難る諸君は固より

確固

佐. B

愼

太

鄋

四ヶ月有余皇軍の向

ふとこ洲各國は今次の支那

變に

第でありまして偏に深厚な」らないのであります

聖慮に報ひ奉らんとす。大なる秋に當つて平市の代しありまして偏に深厚ならないのであります。 此重

際し帝國の自衛的手段に

顯 Œ

を執

戰 玆 12

カコ

3

情勢に

於

H

Ġ

亦恐懼感激に堪えざる次

遭遇する

を覺悟せねばな

计其

定刻の時間に會場たる聚樂市會議員にでもなつた方は 事とて五十銭 面せる入營軍 市民一般の歡送會を催した一般つてむしや! 出して去る十一月二十八日|場ではまだ開會前から袋を|事だ、何もいらい新聞記者 ても八十余 ので吾人も此 我等郷土たる大平市 非常時局 營軍人をて取りによこさせるやら式 は、小供に風呂敷をもたせ」よりか親切があるなれ 意して正すべきだ、まして った、市民よ悪癖は互に注 る人やら甚だしきに至りてなをあるのでもない ら質に見にくすぎる程であ 喰ふ人や|の様に自分の新聞に 廣告による其代償を得て居 は及ばぬと思ふよ、吾人は 業者のよしみで話してやる

、管兵を送る辭

平市長 護し人類 青 鋒 平

態が如何に展開し如何に長

に亘るさら吾々國民は襲

行の普及徹底に努め今後事

千

趣旨を體して實踐實

公の赤誠を致し國民精神總

平市

聯合

年團

Ш

より感謝を捧げ益々銃後奉

それ は同 事だ、互に相助け働く事に 辭を速記して諸賢に呈す。 の發展は伊藤氏一人の力で 最近小名濱町には常磐新聞 るに痛感し 吾等平市の同人よ少しく正 んに其町制に盡力して居 く共職責に 生活の安心を得ら

らしき權威がある筈だ。一みでありますが諸君の先輩 書かぬがも少しく同なるが上に同業者の たる我が忠勇無双の出征 に依ることは申する畏き極 天皇陛下の御稜威

て豫測を許しません從つて 國民の覺悟も亦 ありまして事態の推移決 して吾々國民の感謝感激措位に對し優渥なる勅語を下 土の奮努力の結果でありま る出征將士各位に對し衷心 の秋に當りまして我忠勇な を要する秋であり 際狀勢は極めて微妙複雑で 併し乍ら現下東亞を繞る國 克はざる所であ 一段の緊張 ります。 ます、 位と共に吾々銃後の全國民 畏くも去る十一月十二日

衆に浴したる皇軍の將士各 功さ忠烈さを嘉みし給ひ更 に其志氣を皺舞し 戦とを察せられ深く其の動 賜はり今又聯合艦隊、支那 北支内蒙方面 士各位に具に 艦隊並に上海戰線の將 その艱苦とカ の出征將士各 給ふ有難 、る光 |國の大義を致し以て聖旨に| ん 幾多我等の先輩もかく 報い奉らんことを切望して し神明の加護に因り盡忠報の本領でなければなりませ 帝國軍人たるの使命を完ふ力持」と云ふのが東北健兒 |國家の爲健舞に留章せられ||勇猛所謂「氣はやさしくで | 平市の極めて光榮するとこ | 兀來磐陽の青年は質質剛健 己まぬものであります ろであります 希くは益々にして寡黙温順にして而も 大の名譽なるのみならず吾のであります と信じます。之質に諸君最厚の青年に垂れて戴ぎたい あつたのであります どう

と致します 以上聊か微衷を述べて送辭生きその溫情の中に潜む負 崎 忠 幾日かして父母の膝下を雕のであっます。諸君はあと ぞ諸君もこの傳統的精神に くまでがん張つて戴きたい けじ魂を遺憾なく發揮しあ

一代表して弦に歡送の言葉を 大日本帝國軍人として入營 して均整せる肉体と純真に 申し述べます事を光榮の至 諸君は御兩親より其 りと存ずるのであります して剛健なる精神とを惠み るの榮譽を荷はれたので 今ここに戦時体制下 、強健に つて目的の大半を達成し得たりとも銃後の重責を忘る幾多皇軍將士の血と汗によがら郷黨の中堅として一日 責任に任じて参つたのであます。諸君の入營中は我等し諸君と相共に今迄銃後の目を保つて欲しいのであり 致し深く内外の情勢を認識なく飽迄純真なる青年の面 年は時恰も支那事變に**際會り**健康を損するか如きこと | りますが暴支膺懲の聖戦も|青年團員一致協力及ばずな ざる所であります 我等青の五分間に於て無軌道に走 表し衷心より祝福して止ますが感激に醉ふの餘り最後、黨青年一同が満腔の敬意を驛を出發されるのでありま 君の名響たるに止まらす郷れ萬蔵の歡呼に送られて 平

は實に容易ならざる國難に ます時に今後の大日本帝國 の此の事柄をよく!~考へかれん事を切望致します もの支那事變の後に來るも で は勇躍して入營の途につ (二二、一一二八)

人道を尊重し īΕ

の顯現でありまして歌喜

なる民族意識の生

名濱 黑樋高小器 平雄速保平

い名濱工場地 本 水 素 株工 式業 會 鎭 祭前

刑製船 五場

貴

族

金農

成

通

日本曹達林式會祖

鑛

所

三井生命保險株式會社大正火災保險株式會社 代 電話一四四番小名濱町築港內 理

五十百第

組合 長小名濱漁業 本水產工業小名濱工場 小名濱運 水 Accessed a 野 送 金 順 式株 會 雕 藏 弘

名濱消 磐城海岸軌道 本 支配人 德 式株 會 社 次 風

市

田

話

近小比飯野高藤小福 長 重伊

新

米

町植植 會 議 田町 同植 H 消防組頭出町會議員 樋 秋通 坂 本 看產 護婦 婦 電亀 T 學 五太 进 校 番則

請士 石 城 田 負木 業 郡 北役 本 HT 鄉 野 繁 傳 勘 助

क्त 年 水 便 局 通 末 石 謝 炭 九間 恩 九店

料旅 理館 淸

登

崎

村消防組頭

磐域セメ

三井生命保險株式會 社平代理店 電話九番九九番 東京振替口座一○九五六

N 約代理 店

電三八番二四八番

銘 右屋 帶 向毛ネール パラマンマ新柄 松山紺カスリ 圓五十錢均一 一圓五十錢

月五日より 義

1

驛 湯本自動車商 前

議田員町 田 岩町 驛 松前 淸 屋 旅 館 昇

植出 本町 勢 屋 動 車 部

島縣石城郡好間村